

一休という多面体
その〈像〉と語り

一休はどう語り どう語られたのか

飯島 孝良

古来、日本においては禅と美術、庭、建築、能、詩歌などが混濬こんくわんして、独自の展開をみせている。これは総称して「禅文化」と呼ばれる。そもそも、禅そのものが固定したものとより、受容する者によって可変的に表現され得る特性を有していることも大きい。その時代ごと、その地域ごとに、禅はさまざまにイメージされていく。そうしたイメージの展開する過程こそ、禅の文化史というべきものである。

そうした文化史的展開を知る際の「窓」といふべきものとなるのは、ひとつは一休宗純（二三九四〜一四八一）ではなからうか。おそらく、一休の名を聞いたことのない日本人はそういないであろう。とはいえ、一休に関する諸文献において、どれも等しく臨済宗の

禪者として語られてきたかという点、必ずしもそうとは限らなかつた。そこには、一休のことは『狂雲集』『自戒集』そのものが難解であるうえに、寛永年間まで刊行されなかつたことなども関わるだろう。『一休和尚年譜』においては直弟子によつて生真面目な師として語られる一方、一休の同時代には「風狂」と看做されることもあれば、近世の『一休咄』などでは「とんち坊主」として大衆化していく。つまり、禪が可變的に表現され得るものであるように、一休の〈像〉も（一休自身の表現も含めて）語る者の問題意識によつて可變的に表現され得るものだったといえる。

その一例といえる『山上宗二記』（天正十六年「二五八八」年）によれば、一休が「茶祖」といわれる珠光（一四二三～一五〇二）に宋代の高僧・圓悟克勤（一〇六三～一一三五）の

墨蹟を授与し、茶道は禪から強い影響を受けたといわれてきた。ただ、一休と珠光の交流は疑義も呈されており【注】、いわば一休と茶道との影響関係はひとつの「物語」として重んじられてきたものとみられる。とはいえ、少なくともここで重要なのは、何故そうした逸話が残されたのかではないか。茶道において、師から弟子に脈々と教えが受け継がれていくべきことが重視され、その作法において平常無事が重んじられるとき、禪との交点が見出されていくのである。そうした関係の出発点に、他ならぬ一休の〈像〉が据えられていくことこそ、禪文化のひとつのあらわれといえるのではないか。この〈像〉は、文化史上の「語り」としてしばしばわれわれの前にあらわれてくるのである。

この〈像〉とは、いわば一休とわれわれのあ

いだにある「多面体^{ポリソム}」というべきものといえる。この多面体を通して対象を見ると、それが光の屈折のためにゆがんで見えもするし、あるいは光の分散で七色となり、彩り豊かに見えもするのである。一休その人のある側面が極度に拡大されて語られたり、多様に脚色されて語られたりして、「多面体」的な〈像〉となるのである。そうした多様な〈像〉が或るひとつの「語り」を形成してきたところにこそ、禪が日本文化の中に位置づけられた一端が見出せるといえる。

一休については、まず一休自身がどう語ってきたか——『狂雲集』『自戒集』といった著作や一休の頂相にある自賛など——が重要な資料となる。また、一休の直弟子たちの語り（『一休和尚年譜』）や一休と対立する勢力た

ちの語り（『大徳寺夜話』など）を読むと、宗門内で一休がどう評されていたかを窺^{うかが}うことができる。加えて、中世から近世、更には戦後日本に世俗で人気を博してきた一休は、さまざまな文献や芸術を通して数百年にわたり語られ続けてきたのである。一休がどう語りどう語られたかは、禪のイメージが日本文化史上でどう展開したかを伝えるものと考えられる。

〔注〕芳澤勝弘「一休「祖師摘茶」画賛について」（『禅文化研究所紀要』二八号、二〇〇六年）ないし田中博美「茶道大成期における堺と南宗寺の位置」（『茶道学大系2』、一九九九年）参照

飯島 孝良（いじま たかよし）

花園大学国際禅学研究所専任講師。専攻は禅文化史・日本宗教思想史。主な著作に、『語られ続ける一休像—戦後思想史からみる禅文化の諸相—（ペリかん社）ほか。』